

クレメンス ・ハーゲン マスタークラス 開催

去る3月13日、サントリーホール・小ホールにおいてクレメンス・ハーゲン氏のマスタークラスが開催されました。当日は受講者3名、聴講者60名にお集まりいただきました。

マスタークラスを受講された3名の会員からのレポートをご紹介します。

●受講者

門脇 大樹 (*ピアノ伴奏 居福 健太郎) / ブラームス: チェロ・ソナタ第1番 ホ短調 第1楽章

橋 麻里子 (*ピアノ伴奏 丹 千尋) / シューベルト: アルペジオーネ ソナタ イ短調 第1楽章

遠藤 真理 / コダーイ: 無伴奏チェロ・ソナタ 第3楽章

(通訳 寺谷 和久)

改めて譜面と向き合う大切さを痛感

門脇 大樹 (S - 050)

※ まず最初の8小節目、低音のメロディーをスラーをつけてひくのではなく、楽譜のアーティキュレーションの通りにひくことで、作曲家の意図に近づける。レガートと書いてあるが、歌うのではなく語るようにひくことで、より心に伝わる。そして、それに対してピアノは、ひとつひとつの和音でとまらずに、もっと長いフレーズで感じる。

※ 17小節目の4拍目のAの部分アウフタクト的に新しく感じるのではなく、ピアノの17小節目の2拍目に入る和音が次の小節目の1拍目までタイでひきのばされているので、チェロもピアノと共に大きなフレーズでとらえるべきである。



※ 26小節目の最後の8分音符を、次の小節目のアウフタクトとしてしっかりととらえるように。また、その小節目のEからB、2小節目後のFからCを音を切らずに、音楽の流れの中で跳躍を出してひく。

※ 46小節目から53小節目の8小節目間、第2主題へ向かう中で先へ生きたいという気持ちのために急いではならない。その気持ちをぐっとこらえている感じで。また、その8小節目で盛り上がりすぎると、第2主題が映えない。両方ともfで書かれているが、fには音量を増やすという意味だけでなく、表現の変化に対して使う時もある。第2主題が一番生きよう、コントロールしてもっていく。

※ 66小節目のピアノが突然フォルテピアノになる所で、あまり意図的にテンポを変化させると、逆に緊張感がなくなってしまう。テンポ感は保ったまま、雰囲気だけかえる。

※ 78小節目からppになり、静に流れだす場面で、たださらりとすぎてしまわずに、83、84小節目のespress.、85からはdolceといったような、微妙な譜面の表れを明確に感じる。このような、推意的な部分に隠された表情を絶対に見落とさないこと。

※ 展開部に入ってから、103小節目のespress.の部分。ここは、開放的な部分ではない。弓を必要以上に多くかえさず、4小節目間を大きなラインと感じて、緊張感をぬかない。

※ 107小節目から、チェロがDesの音をシンコペーションで4小節目間繰り返す場面で、ピアノの和音の変化を感じて、それに色をそえるつもりで、Vib.を変化させる。

※ 114小節目から125小節目まで、ピアノとチェロが共にffで盛り上がる所。弓を切って、ただ大きな和音でひくことにとられるよりも、書かれているアーティキュレーションを守ることで、はっきりとしたキャラクターが伝わる。

※ まとめ 残念ながら、この辺りまでしかレッスンが受

けられなかった。とても細かいレッスンだった。全て目の前で注意した部分ができるまで、実際にひいて下さった。音色の微妙な変化や表情の繊細さが、半端ではなく、圧倒された。しかし、その表現の全てが楽譜の中から見つけだされたものだった。改めて、譜面と向き合う大切さと、それがどれだけ作曲家と直接繋がっているかを痛感しました。

音楽的に何を要求するか、その為の技術

遠藤 真理 (S - 044)

冒頭 嵐のように勢いのある解釈はよいが、せきたてられすぎないように / 出だしの八分音符はオンタイムで1音1音命を与えるように / 拍感を感じる事がとても大切
61小節 符点のリズムははっきり。符点八分音符と十六分音符の形では衰退せずに十六分音符をはっきりと、キャラクターを出すこと

95小節 Pizzがcrescになり、次のメロディがくるとき、弱拍から始まるメロディだがアクセントは強調して

119小節 十六分音符の形で高いポジション、D音を保持音のようにして。上はメロディをあたかも簡単なメロディを弾いているように聴かせたい。そのために常に頭はクールで、大変難しいパッセージだが構えないこと。*f* になってから、アクセントをはっきり

174小節 Sub.*p*になり、*f.p*が交互にでてくるところはキャラクターの違いが必要だ。そのためにはSub.*p*になる時少し間をとること。

226小節 4つの和音を同時に弾く所では時間を使って、アクセントを重く幅広い音を求めた方が音楽的だ。

239小節 *mf* *sonoro marcato cantando*の所では*mf*の音量を調節すること。そうすることによって、次に出てくる勢いのあるリズムとのコントラストがつく。

326小節 ポンティチェロの所におぞましく、そして小さな音で。遠くから聞こえるように。ダブルでTr.になった所は、Sub.*pp*になるが前の音から発生されたように。

402小節 *Meno mosso* (再現部) に向かうcresc.のところは全ての十六分音符にアクセントをつけること

420小節 *Meno mosso* (再現部) のところは*ff*だが*fff*までいくから*mf*くらいに落して

436小節 アコードで上行していく形は時間を十分に使って弓の毛の当たる場所を完全にコントロールする事

567小節 十六分音符が終わってPizzに入る所は休みはないので必ず音に方向性があるように

582小節 3和音のglissで浮浪する所はまだ下の方にいる感じで

596小節 *p*に落ちてarcoになるまでのPizzは全てにアクセント、そして転げ落ちるようにarcoに向かう

625小節 和音を1つ1つ大切に弾くこと。早くする気持ちだけにとらわれないように。最後の15小節間は、バス

は特に音をしっかり出すこと。

感想 コダーイの3楽章はとても技術的に難しく、私は楽譜通りに音を並べて弾くことばかりに頭がいていました。しかし、ハーゲン先生は音はずしたり弾けていないことよりも、音楽的に何を要求するか、その為に技術があるという感じでした。終始、譜面から目を離さず、主観ではなく、作曲者が要求する事を考えレッスンされていたように思います。実際テンポの癖や、弓の癖などは指摘されましたが、音楽的な要素に貧しい事を一番感じさせられました。これは一番私に必要であり、おそらくこれから音楽を勉強するうえで大切すぎると思いました。

ピアニストとの対話を自然に音に表わす

橋 麻理子 (S - 008)

ハーゲン氏のレッスンはとても興味深かったです。

シューベルトのアルペジオーネ・ソナタの1楽章を見て頂きました。

問題点としては、ボーイングとフレーズを注意されました。キャラクターが違う部分はそれぞれボーイングを変え、その際、フレーズの中のどの様な部分なのかという事を意識して弾くように、と仰言られました。左手は楽譜に書いてある音に沿う“作業”であり、右手はフレーズを作る。

そして、自分の弾きやすいボーイングで弾くのではなく、作曲者がどんな意図でそのフレーズ(ボーイング)にしたのか(楽譜に書いたのか)を考えて弾く事が大切。と仰言られ、改めてどういうボーイングで演奏するか、という重要さを感じました。

ハーゲン氏は室内楽の経験が豊かなので、チェロだけではなく、ピアノにも音楽を作っていく上で貴重なアドバイスを沢山下さったと思います。

例えば、出だしのピアノのメロディーの弾き方ですが、最初弾いた時ゆっくりしたテンポで始めましたが、テンポの感覚がなくなってしまうので、もう少し速めに(テンポ感覚をはっきりと。)弾いた方が良い、との事でした。

チェロとのバランスもハーゲン氏が指摘して下さいましたのでとても良くなったと思います。

ソナタはピアノと一緒に音楽を作っていくものです。

今回、ソナタでレッスンを受けて、細かいニュアンス等、誰が聴いてもわかるように、そして伝えられるようにもっと勉強が必要だな、と思いました。ソナタの難しさ、つまりピアニストとの対話をいかに自然に音に表わせるか。それをハーゲン氏は教えてくれました。

短い時間の中だったので、ハーゲン氏が指摘して下さいました事が自分の中で消化しきれずに終わった部分もありましたが、また機会があれば是非レッスンを受けたいと思います。

第3回日本チェロ協会総会・サマーキャンプ実施

去る6月1日～2日、山梨県・山中湖にて第3回日本チェロ協会総会・サマーキャンプが行われました。晴天に恵まれる中、堤会長をはじめ中島先生、山崎先生と16名の会員の参加のもとに下記のスケジュールで2日間の日程を終えました。

参加された3名の会員からサマーキャンプ、クリニックを受講された感想を寄せていただきましたので、当日の様子を感じていただければと思います。



6月1日 14:00～

- ・総会
- ・アンサンブル練習（中島先生、山崎先生）

6月2日 9:00～

- ・クリニック（堤先生）
 - 宇野 義雄さん / カザルス「鳥の歌」
 - 入内島 健さん / ハイドン「チェロソナタ C-door」
 - 石島 栄一さん / ブラムス「チェロソナタ 2番」
 - 半田 昇三さん / コレリ「チェロソナタ」
 - 谷口 仁宏さん / ポッケリーニ「チェロコンチェルト」

11:30～

- ・アンサンブル発表会
- 昼すぎ 記念撮影後、解散

会場 / 山中湖 ペンションセロ



ちょうど3年目のアンサンブル

上園 哲司 (R-171)

前は都合がつかなくて参加できなかったJCSサマーキャンプ。当分味わえない自国開催のW杯にどっぷり浸かっている自分をどこかへ押しやり、チェロモードに完全に気持ちを切り替えて、いざ見参！

キャンプのプログラムの中で、一番時間が掛けられているのは、参加者によるアンサンブル。入内島さんと石島さんチームに分かれて、僕はグーパーじゃんけん石島さんチームに。宇野さん、織田さん、菅田さん、永山さん（50音順）とともに練習開始です。色々な曲を弾いてみた末に選ばれたのは、クレンゲルの“Theme and



Variations”。いろんな「風味」を味わえる曲ですが、この風味が私には結構な曲者。夕食の時間のお知らせが来るまで、時間の経つのを忘れて弾いていました。

夕食後は山崎先生のご指導による本格的なアンサンブルの練習。旋律と伴奏での強弱のバランスの取り方、4分の3拍子と8分の6拍子の切り替えを感じる事など、ただストイックに弾いているだけでは気づかない「風味の出し方」の一端に触れることが出来たように思います。

途中、堤先生が見に来られたのも気づかず、とても密度の濃い時間はあっという間に過ぎていきました。

そして次の日、いよいよアンサンブルの発表です、が織田さんが都合がつかず帰られることに。3番チェロが居なくなってしまうか思案している僕らの視線の先にいらしたのは...、そう、堤先生。宇野さんが堤先生に事情を説明したところ、我々アマチュアどもの無茶なお願いを快く引き受けてくださり、その瞬間から、とても嬉しいのと緊張感のドキドキとが身体の中でせめぎあいを始めてしまいました。

入内島さんチームの演奏の後、いよいよ堤先生と石島さんチームの演奏。演奏中は、山崎先生のレッスンのことを思い出し、集中して演奏することが出来ただけで、終わった瞬間、緊張の糸が切れたのか酸欠になりそうで、個人的にはなんだか分からない幕切れでしたが、チェロ暦ちょうど3年目の日を、とても思い出深い形で締めくくって、僕のチェロ人生は本当に恵まれているな、と感じました。

2年半前の初めてのサロンのときは山崎先生の仰る事を殆ど理解できないまま終わった自分が、今回は何をどうすれば良いのかだけは理解できる位にはレベルアップしたとはいえ...、アンサンブルは石島さんに大いに助けられ、まだまだ半人前のセロ弾きだということを知ること。



仕事の忙しさに甘えて定期的なレッスンを止めてしまったツケと独力での練習の限界が、ここにきて完全に露になりましたね。ちゃんと見てもらわなきゃダメだわこりゃ、などと思いながら家路についたのです。(たまには普通の文章も書けるところをアピールして筆を置くことにしよう。...)

チェロも仕事も新時代

半田 昇三 (R-139)

先日、生まれて初めて、ピーター・ドラッカーという有名な経済学者の新刊書“ネクスト・ソサエティ(NEXT SOCIETY)”を買った。経済学の硬い文章が嫌いで、普段は買わない種類の本である。何に惹かれたかということ、本の帯に“歴史が見たことのない、未来がはじまる”とある。数頁めくると“19世紀以前は長い間、農業社会であった、20世紀は工業(工場)社会であった、そしてこの21世紀において、製造業はもはや唯一の主役ではない、そしてこれらの変化はすでに起ったことである、もう元には戻らない。”

予想に違わず、読みづらい本で、まだ半分も読んでいないが、IT(インターネット)技術による社会経済構造の革命、労働者の多様化、高齢化を伴う、21世紀の知識産業社会の到来は、20世紀とはまったく違う社会になるはずだと言う。なぜ経済学とは無縁な自分がこの本を買ったかと言うのは、こういうことである。じつは3年前から、在宅勤務をゆるされて、勤務時間のほとんどを自宅で過ごしている。2年前からは東京にいる必要もないということで、パソコンと一緒に、静岡県の田舎に引っ越してしまった。自分にとって21世紀はすでに始まっているといったら、かっこよすぎるか?

そして大事なチェロの事である、チェロのために在宅勤務をしているといったら、女房に怒られる、仕事のために在宅勤務をしているといったら、うそをつくなど上司は言うだろう。でも私にとって、どちらも正しいことで、インターネットとパソコンのお陰でこうやって趣味

と仕事の両立が出来る(!?) 幸せ者がこの21世紀にはいると言うことである。そして今回、日本チェロ協会の主催で、無料公開レッスン付きのサマー・キャンプ開催の知らせ。静岡県の田舎に住む、孤独なアマチュア・チェリストにとって、全国の、一流プロのチェリストと交歓できるまたとないチャンス、スケジュールさえ空いていけば行けない理由はまったく見つからない。雨上がりの爽やかな土曜日の午後、いつも通る中央高速道ではなく、沼津から東名高速を北上して御殿場経由で今回5度目のお世話になる山中湖のペンション・セロにチェックイン、山崎伸子先生と中島顕先生のご指導でチェロ4重奏の練習から始まった。いつものことながら、すばらしい先生方の一言一言は我々アマチュア演奏家の迷い、思い込み、無駄なエネルギーを短時間に取り去って、その場の即席合奏とはとても思えないアンサンブルがゴース・ホールに響きわたる。そして皆これでアマチュアか?と思うほどの腕前の方々なのだ(私の隣の二名のチェリストは翌日ポッケーニとハイドンのコンチェルトをレッスンしたのですぞ!!) その晩は練習後、深夜一時半頃まで車座になって言いたい放題のプロ・アマ合同飲み会(山崎先生、中島先生、暴言、無礼お許し下さい)。もうこの頃はなんども来てよかったと思いながら、幸せになった私は初日を終了する。

そして翌日は堤先生の公開レッスンの日。朝、チェロをケースから出そうとしていると、一冊の本(“チェロを生きる” 堤、剛著、新潮社、もちろん著者直筆サイン入り)をチェロ協会スタッフの田中さんから、手渡された。参加者全員に堤先生からの贈り物だと言う。すでに読み始めた他のメンバーのかたから、とても面白くて、知りたかった事が沢山書いてあるとの事。このころから、高まる緊張感とともに、私(アマチュア)がこんなこと(公開レッスン)していいのだろうか?突然不安になった。

私は4番目の生徒で、コレルリのチェロ・ソナタ(二短調)を選んで臨んだ。1楽章はプレリュードで普段は目をつぶっても(?)弾けるはずの曲。ところが普段は舞台上アガラナイとアマチュア仲間には自慢することがある自分の演奏する音が、どうも自分の音ではないようだ。先生の本にも“シュタルケル先生が、プロだったら、どこでも、どんな場合でも、たとえ出だしで硬くなったり、アガったりすることがあっても、2分位たったら自分に戻れなければ駄目だといわれた”と言う個所がある(248頁)演奏開始後、自分でもどうもおかしいな、これは堤先生のプレッシャーだ!!と心の中でいくら叫んでみたところアガりは収まらない、プロフェッショナルの持つ意味、厳しさを再認識。

ようやく先生から、助け舟がでる。愛器モンタニャーニャの美しい音色で自ら、A音のアウフタクトからはじ

まるメロディーを弾いてくださる、ここは息を吸って、ここは吐いてと具体的にお話になりながらの演奏である、息を吸うたびに、その音にふくらみが、丁度酸素が体内に入って、肌が桃色に色づくようになるのがわかる。自分もやってみる、ところが緊張のために息がうまく吸えない。息を吐くことはできるのだが、うまく吸えないのである、丁度先生の言っていた呼吸の仕方とまったく逆になってしまう。人前で恥をかいたが、これでいかに呼吸と言うものが演奏にとって大事なのか良くわかった。

次にいわれたことは“先取り”ということであった、コレルリのソナタ1楽章は三拍子で三拍目のアウフタクトから音が始まるのであるが、一拍目、二拍目をどう感じるか（先取りするか）で、曲の始まり方がまったく変わってしまうと言う、コレルリのソナタの最初の1小節だけでこれだけのことを言われた。その他自分のレッスンではなかったが、大きなホールで弾くときは、楽器からいかに多くの倍音を出すかが勝負だと言う、その仕方はナント左手の指板に対する圧力で決まるのだという。強く押さえると締まった、澄んだ音が出るがこのような音は却って倍音を消して、遠くには届かない音になるといふ。むしろ音がかすれるような弱い圧力で指板を押さえたほうが、倍音は多く出てより遠くに届く音になるといふ。この他こんな事まで教えていただいて良いのが（無料レッスンである！）おそらく商売上の秘密に属することに違いないことが、どんどん気前良く我々アマチュア・チェリストの前に差し出される。この短文の何十倍の情報も先生からいただいた本には書いてあるが、最後に本の内容で非常に印象に残ったことで“リソース・パースン”のことに触れたい。恐らく、堤先生はチェロ協会の設立主旨にそのままつながる考えを表明されていると思うからである。“リソースというのは（中略）何でも良いのだが、誰かが私の知識なり、知恵なりを必要としているときに、私が必要とされているものを提供できるならばリソースがあるということになる”昔は先生が生徒に対して、こうだから、こうしなさい、と一方的に教えた。しかしそういう教育は時代遅れということである。（中略）教師は教え込むのではなく、生徒を刺激して生徒自身が何かを自分でやってみよう、発見してみようと思わせなくてはならない。（中略）私たちのところでは、先生もある意味で今は友達みたいなものだ。”

この文章の“先生”を、チェロ協会のプロ・チェリスト、そして“生徒”をチェロ協会のアマチュア・チェリストに置き換えると、堤先生の考える理想の日本チェロ協会になるのではないかと。インターネット社会の話に戻るが、我々の仕事の仕方はこれからもっと変わるのかもしれない。たとえば日本人の誰もが、人生でいくつもの職業を経験することが出来るとか、アマチュア趣味の世界でも、もっと状況は変化してプロとアマの境界が

はっきりしなくなるかも知れない。そのときは日本チェロ協会に入っていたことに感謝できるように、今からでも努力したいと思う。楽しかったサマー・キャンプを企画、運営していただいた、チェロ協会のスタッフの皆様、本当にありがとうございました。

サマーキャンプに参加して

都もと子（R-159）

6月1日、2日の山中湖で行われたサマーキャンプに参加してきました。1日は夕方から、しかも一番最後の参加だったので、私の体験した範囲でその場の雰囲気をお伝えできればと思います。

とにかく参加中は楽しいびっくりが多く、リフレッシュして帰ってきました。

1日は午後6時半からのチェロアンサンブルに間に合うよう、5時過ぎに着いたのですが、皆さんすでに練習をしていて、受付をするなりすぐ練習に参加して下さいと言われてまずびっくり。

一般会員の方は15名ほどだったので2グループに分かれていました。少人数のグループなのでお互いの音を聴き合うことができ、短時間でまとまりができました。さらに中島先生、山崎先生の指導を受けるとどんどん音が変わってきてびっくりしました。両先生方にはアンサンブルだけでなく、演奏の基本的なこともアドバイスしていただき、とても為になりました。

予定の練習終了後は深夜まで親睦を深め（要するに宴会ですね）なかには1時頃まで楽器を弾いていた人たちもいました。参加した方は大半がお仕事をお持ちだったのですが、お話を聞くと、皆さんとにかく忙しいのに楽器を弾いて、おまけにキャンプにまで来てしまうのだからびっくりです。

2日は朝から堤先生のクリニックがあり、受講する方たちも堤先生も音楽を楽しむ様子がとても印象的でした。その後アンサンブルの発表をして解散となりましたが、皆去りがたく撮影大会となりました。デジカメ持参の方も多かったので、きっとどなたかのホームページでご覧になった方もいらっしゃると思います。

最後にまとめると、参加しなくちゃ損！の一言です。楽器がなくても先生方のアドバイスを聞いているだけで納得することが多く、自分がレッスンを受けているような気になります。これも少人数ならではのメリットだと思います。

最後の最後になりましたが、大騒ぎにつきあっていただいたペンション・セロのご主人、どうもありがとうございました。

菅野博文先生

SPECIAL INTERVIEW

インタビュー：三木隆二郎さん(R-001)

(3/17 於サントリーホール)

この日に開催されたチェロ・サロンに先立って、菅野博文先生に会員の三木さんからインタビューを行っていただきました。演奏家としてもご活躍されている菅野先生ですが、当日は特にアマチュアチェリストがチェロを弾く際に心がけたいこと等を中心に、教える立場としての菅野先生に様々なことを伺いました。皆さんが今後チェロを弾かれるときのご参考になればと思います。

三木氏(以下、-) 今日とはどちらかと言うと演奏家としての菅野先生より先指導者としての菅野先生に、アマチュアチェリストに自分の奏法をチェックしていただけるようなアドバイスを色々とお伺いしたいと思います。このあと予定されていますチェロ・サロンには10名ほどの参加という事ですので、参加されない多くの会員の皆さんに向けて、うまくいかどうか分かりませんが紙上クリニックを試してみたいと思います。その前に、チェロ協会の会員の皆さんは菅野先生のご略歴をよくご存知でしょうが、ずいぶん長いことアメリカなどで指導された経験をお持ちで、現在は昭和音大で教えていらっしゃるわけですが、特に斎藤秀雄門下であった先生が海外に出られて今はプロはもちろんアマチュアなども時々教えていらっしゃるんですね。今に至るまで指導者としてのここまでのキャリアの中で特に影響を受けられた人などお知らせいただくと、皆さん興味を持たれると思います。よろしくお願いします。

菅野(以下、K) はい、教えるときの知識のことで影響を受けた人ということでは、やはり最初の先生である斎藤先生の存在は大きいですね。シュタルケルや、ピエール・フルニエにも習いましたし、テクニクの上では年を取ってから「なるほど、こういう事か」と思うことはあるわけで、今まで習った色んな方、例えば先輩の岩崎さんや堤さんもそうです。特定のどの人ということはないんですけど。

- 先生はフィラデルフィアのテンブル大学に確か随分長くいらしたんですね。テンブル大学へ行かれたのはどのようなきっかけでしたか?

K アメリカでシュタルケルのところにいたとき、ミッドウエストといって田舎にいたんですね。もう少し大きな町へ出ようかと考えていたときに、ユニオン新聞……音楽家の組合が出している新聞で……それに掲載されていたオーディションを受けに行き、そのポジションが取れたという感じです。

- シュタルケルさんの紹介などではなく?

K もちろんリコメンデーション(推薦)もあったけれども、大体オーケストラの団員募集なんかと同じで、オープンですから。そのポジションに120~130人来てたんだと思う。

- すごいですね。先生になるためのオーディションではどんな事があるんですか?

K 僕がつけたポジションはアシスタント・プロフェッサーっていう事だったんですけど、学校のピアノ・トリオのチェリストが辞めたんですね。まずはそのピアノ・トリオとして年に20~30回程度でしたか、それが学校の仕事になってるんです。だから、オーディションも自分のものを弾くのと、そのトリオに入って弾くことの両方がありました。それとインタビューです。

- インタビューではどんなことを聞かれたんですか?

K 僕はその前にも教えていたんで、前の学校ではどんな風だったかとか、教えるにあたっての自分が持っている抱負とか、トリオで弾

いてどうだったか、とか。「こんな風にしていこうと思うんだけど、どう思うか?」とか、どちらかと言うと同じプレイヤーとしての話が多かったですね。

- そうすると指導者としてのインタビューだけれども、むしろプレイヤーとしての側面が割と……

K そうです。僕にとってもそれが魅力でした。向こうピアノ・トリオとしての相性が重要だったようです。

- 10数年ですか…ずいぶん長いこといらっやって帰国されたきっかけは?

K たしか12年くらいだったかな。そうですね。これというのはいないんですけど、その頃日本の景気が良かったからなんです。(笑)円高になったんでビックリしました。だから日本で働いてもいいかな、と。アメリカではオーケストラでも給料のいいところへ動くのが、ごく普通の考え方ですから。僕はアメリカに16年いましたから、お金で自分の時間が買えるっていうような、考え方がアメリカ的になってた面はありますね。僕が渡米したころは1ドル=360円くらいで、その頃は120円くらいになってましたから。

- そうですよ。そして日本帰国後は現在まで昭和音大で教えていらっしゃるわけですが、アメリカで教えてらしたのと日本に帰国されて教えてみて、環境とか学生に違いは感じられましたか?

K テンプル大学はさほどレベルの高くない学校なんですけど、僕のところへは個人的に例えばカーティスの学生やその他のところからも来るわけです。日本でもいろいろな大学から個人的には来てますし、室内楽のコーチをしたり、教えるということと言うと、学校の仕事だけでなくいろいろ教えていますので、そういう意味ではあまり変わらないですね。でも、アメリカ人と日本人の差が随分あるかなあ。

- その差っていうのはどんなところでしょう?

K 「アメリカ人」って言ってしまえば…よくないかも知れないけど。でもやっぱり人種で分けるといことじゃなくて個人的な事ですね。

- ちょうど今日ここに「斎藤秀雄のチェロ教育」があるんですが、ここで菅野先生が藤原真理さん、松波恵子さんと一緒に菅野先生がインタビューを受けておられて、15年ほど前のインタビューですが、例えば、技術的なレベルの層の厚さから出てくるプレイヤーは、(このときはリ・ハレルのことを指して言うていらっしゃる)めっちゃくちゃテクニクが強い、とおっしゃってますね。チェロ人口の底辺が広いんじゃないかと。チェロ人口が多いと突然変異的にそういう人が出るのでは、というふうな。シフォロとかナサニエル・ローゼンとか。基本的な音楽という以前に、アメリカという競争社会の中で音楽家も給料がどんどんかわっていく中でやってく人達となると違うとか、そういう事はありますか?

K そんなことを言うてましたか。あんまり最近そんなことを考えたことはなかったけれど、最近ではテクニクの素晴らしい人が……具体的に言うと渡辺辰紀君という人がいて、もう15~16年前になれますが彼が学生の頃に聴いてその時から素晴らしいテクニクだったわけです。こないだカザルスホールでリサイタルを聴くと学生の時から何も変わっていない。つまり大学生の時から完成していたんですね。学生のとき僕のところにもレッスンに来たんだけど、何も教えてあげることがない。まだ若いから多くは弾けないんだけど、すぐに手に入ることが分かった。本当にテクニクがきれい(テクニクだけという意味ではなく)なんです。日本に何人もいないんじゃないでしょうか。それは結局やる人が増えたからだと思います。ただそれも何人かの中に1人しかいない、「gifted」ということですよ。

- 先生は、この時におっしゃってますが、日本も歴史が必要だと。それでここ10年、15年で日本にもそういう人が出てきたんでしょうか。

K そう思います。

- それでは、そろそろ今日の本論に入りたいと思います。アマ

チュアの人が陥りやすい奏法のクリニックという観点で、先生の指導法をぜひ詳しくお伺いできますか。

K 要するにテクニックの話ですから、もちろん全然音楽的なことと何の関係もないわけではないけど、あまり音楽的なことと混ぜて考えないほうがいいですね。例えば「音色」と「テクニック」の関係というふうに分けて考えてみる。

- 基本的な椅子の座り方、楽器の構え方、調弦のしかた、弓の持ち方、左手の押さえ方、ボーイングは1種類しかない「レガートボーしかないんだ」...等々、まずは押さえとかないといけないんだけど、とかくアマチュアは楽器が悪いとか理由を別のところに求めて、基本を押さえしていない人がいるっていう感じでしょうか。

K そうだと思いますね。これを一つ一つ説明して皆さんにある程度理解してもらえれば、もう少し色んなことが楽になるのではと思って、いつも教えているんですけど。ただ...「ボーイングは1種類しかない」というと、違った風に取りられそうだけど。活字にすると独断的、この人は一体何を言ってるんだと聞こえるなあ。(笑)つまりストローク...「軌道」の話ですね。軌道そのものはそう何種類もないでしょう。

- この辺を紙(活字)に落とすのは難しいかも知れませんが、説明していただけますか。

K 基本的には楽に、自然に弾けるということです。チェロを弾くと自体特別なことをすると捕らえすぎる人が多いかも知れない。アマチュアの人は特に、手はこんな形で指もこんなに鍛えられていて、とか。僕たちのような何十年も弾いている人を見ると、経過が割と見えないから何かすごい事やってるんじゃないかと思われるんでしょうね。よく説明されてみると大してすごい事はやってない。その辺のところを押さえれば、実際はやってることとやろうとしてることが、プロとアマチュアもさほど変わらないんだと思っていただけるかな。

- 斎藤先生は、ポジションの中で音がズレると怒って左手を叩くとか大変厳しい指導をされてたんですね。いい大人になってレッスンに行くのが嫌だったとか、菅野先生も書いておられますが。

K そうですか?僕は厳しいと思ったことはない。人によって随分違ったんだと思います。僕は歳も違ってきましたね。厳しいと言うは先、緊張してたかな。

- 指導法の話に戻りますが、別に斎藤先生の教えてたらし事と菅野先生の今の「楽に弾けることを忘れちゃいけないよ」というアドバイスはなんら矛盾しないということですね?

K そうでしょうね。...と言うのは、結局斎藤先生もそういう話をなさったっていうのは、先生はフォイアマンに習った、というかフォイアマンを見ちゃったことで、こんなに楽にチェロを弾かないといけないのか、とそこに僕が考える発想が埋めこまれたんだと思いますよ。ご自分もかなり弾けたんだと思うけど、それはもうぶっ飛んだでしょう。それで「どうなってるんだろう?と、実に寸暇を惜しまず研究されて、色んな人にそれを試してもらいましたから。僕もその試された人間の1人です。それが出来たのは趣味で教えていたから。そういうところに文化とか教育が育つんですね。趣味でやっているからあれだけ高い水準でできたんですよ。

- プロであれアマであれ、楽器を特別なものと捉えずに一番自然にナチュラルに弾くことが大切ということなんですか。

K ええ。楽器と肉体の関係では自然にすると楽に弾けるはずなんです。まあけっこう不自然なことをやるから、却って話をややこしくすることも多いですけどね。肉体的には皆同じわけだから、アマチュアの人もちょっと直すとかよくないです。

- 私も菅野先生にグループレッスンを受けたことがあって、ビックリしたことがあります。先生のおっしゃる常識が、今まで他の人に教わったのと違うので。

K あ、そうですか。それは興味深いなあ。どんな風に違いますか?

か? どんな方に習いました?

- 私は基本的に師匠は1人なんです。大学時代に数年習って、卒業後は門下生として夏合宿に参加したりしたくらいですが。菅野先生の教えてらっしゃる現場をはじめて見せていただいたのが、日立室内楽フェスティバルでカルテットの指導をされている時でした。例えば、音がどんどん小さくなるフレーズで、そのフレーズの頭のところを弾いているときにどんな小さな音でもしっかり発音がある、とか。レガートボーでアップボーからダウンボーにいくときの動きだとか。そんな風に、先生の教え方は「要素」に分解していかれるんですね。チェロ・サロンで倉田先生のご指導を受けたことがあるんですが、8の字運動とおっしゃってて、あとはチェロ・サロンでヨガもやりました。倉田先生の発する“気”でこういう風に弾けるようになるのかあと思えるような。我々アマチュアはあまりシステムティックでなく、TVでやっているのを観たり「これいいな」とかいいとこ取り、つまみ食いみたいに弾いてますから...

K 今の話は面白い。僕もこんど(倉田先生のチェロ・サロンに)出てみよう。(笑)倉田先生は僕の4~5年先輩だから僕も教えていただいた事があって、優しくて素晴らしい先生なんだけれど、いま何って思ったのは、その違っているのは結局人間性、性格ですよね。例えば、「円高になったから日本に帰ってきた」と言っちゃうチェリストはきっと理詰めな話をする。僕はそんなキャラクターなんです。倉田先生なんかは音楽に対してもっとファンタジーがあって。人間が違うから違う音楽が出てくる。「音楽」の話をするとややこしいですね。とてもパーソナルなもので、アマチュアであって誰の中にも先に「音楽」はあるんです。

- アマチュアにとっても菅野先生のご指導はすごく分かりやすいと思います。いちばん私がチェロ協会の人に共有してもらいたいのは、例えば「レガートボーの軌道は一つなんだ」という話を口で言うのは難しいと思うんですが、そのあたりを更に詳しく聞かせていただけると...

K そうだなあ。口で言うのはほんとうに難しいですね。僕がそういうことを簡単に文章にできるくらい十分理解していればいいんだと思うけど。つまみ食いのスイングみたいなもので、いくら蓋を教わっても、実際に打ってみたら「結局球に当たらないじゃないか」みたいな。(笑)

- 我々が例えばですが、スラーのところとスタッカートのところを弾こうとすると、違うと思っちゃうんですが、先生が色んな例を示して「同じですよ」とおっしゃっていただくと、目からウロコが落ちるような。いわゆるウエルナーの教則本どおりだと1頁、1頁「これはスラー」「次はスタッカート」と学んでいって最後までいくと“あがり”となるから、全体の関連性が分かりにくくなるんでしょうか。

K ...そうですね。口で説明するのは本当に難しいですね。これはもう(僕の演奏を聴きに)いらして頂かないですね。(笑)

- ... (笑)。それでは少し別な質問をしますと、アメリカでは誰が教えても極めて当たり前の事なんですか?

K いえいえ。アメリカではそんなことは誰も教えてくれませんでした。僕の場合は、最初にも言いましたが、やはり斎藤先生や岩崎さん、堤剛さん、倉田さん...色んな人に習ったことで見えてくる共通なものがありましたよね。形は違うけど共通するエッセンスといえるものが、そんなところが最初から分かっているといいたるうなあと思って、教えているわけです。

- アメリカで10数年教えてらしたときに、例えばアメリカ人の場合「これだけのレッスン料を払ってるからそれに見合えろの」といった風潮があって、確実に分からせるためにメソッドが必要だった、という事はありますか?

K アメリカならではの事情から今の僕の指導法が出来上がったか? という質問ですよ。それはいいですね。

— 外部環境から影響されたものではないかと。

K そうです。テクニックのことを考えながら長くやってきて、集まった情報を僕は編集しているだけで、自分で編み出したものはないんですよ。

— そろそろまとめという事で...結局アマチュアの人が自分の演奏法に疑問を持って、どうしようかな? となった時に、いちばん大事なのは楽に弾けるかどうかをチェックしてみることでしょか。

K 色んなところに無理がいってるんだと思います。

— 楽器と肉体がギクシャクしてきたら、どこか自分の弾き方がおかしいと考えてみるのと、あとはテクニックのことを勉強したければ菅野先生の演奏を聴きに行きましょと。(笑)菅野先生(笑)の前、新日フィルとエルガーを弾かれていたのが印象的でしたが、いまご自身で取り組んでおられる曲はどんなものですか?

K 僕はクラシックのものがあればいいんです。コンテンポラリーを弾くこともあるけど、いつでも子供の時から知ってるような完成された曲があれば、演奏活動があまり多くないんだけど、僕は完成されたものの完成度を高めたいですね。クラシックのものが弾けるから弾くというのではなく(それもあるかも知れないけど)例えば、ベートーヴェンの3番なんか、何度弾いてももっと綺麗にもっとうまく弾けるんじゃないか、という気がします。

— 完成された評価の定まった曲の完成度を高めたいという事ですね。先生、ポッケリニなんかもお好きですよ。

K なんかブランド品しか買わない人みたいで嫌だなあ...(笑)でも、そうですね。いま自分は何の位なんだらう どうなってるのかなと、自分の中のアチーブメントを計るのに、今後も完成された曲を繰り返し弾いていきたいと思っています。

— 今日はどうも有難うございました。

学生2,000円

お問合せ: サントリーホール 03-3584-9999

アスペン 03-5467-0081

○ヨーヨー・マ チェロ協奏曲

11月19日(火) 19:00開演 サントリーホール・大ホール

出演: ヨーヨー・マ(Vc)、高関健(指揮) 東京交響楽団

入場料: S 17,000円、A 14,000円、B 11,000円、C 8,000円、D 5,000円 [9/14より発売]

お問合せ: サントリーホール 03-3584-9999

ミュージックプラント 03-3466-2258

○向山佳絵子と仲間たち

～曾根麻矢子を迎えて、ラテン音楽の夕べ～

11月29日(金) 19:00開演 J Tアートホール アフィニス

出演: 向山佳絵子(Vc)、曾根麻矢子(Cemb)ほか

入場料: 全席指定3,000円

お問合せ: J Tアートホール アフィニス 03-5572-4945

○堤剛プロデュース2002

～華麗なるヴァイオリンとチェロの世界～

12月2日(月) 19:00開演 サントリーホール・小ホール

出演: 堤剛(Vc)、徳永二男(Vn)

入場料: 全席指定4,000円、学生席1,000円

お問合せ: サントリーホールチケットセンター 03-3584-9999

○ボヘミアの薫り・2

～スメタナとドヴォルザークのピアノ三重奏～

12月17日(火) 19:00開演 J Tアートホール アフィニス

出演: 横山幸雄(Pf)、徳永二男(Vn)、岩崎洸(Vc)

入場料: 全席指定3,000円

お問合せ: J Tアートホール アフィニス 03-5572-4945

情報コーナー

○パドヴァ・トリオ

9月20日(金) 19:00開演 同仁キリスト教会

出演: パドヴァ・トリオ (佐々木一樹(Vn)、マルモ・ササキ(Vc)、ウララ・ササキ(Pf))

入場料: 全席自由4,000円

お問合せ: プロ アルテ ムジケ 03-3943-6677

○中国フィルハーモニック・オーケストラ大阪公演

9月23日(月・祝) 19:00開演 NHK大阪ホール

出演: ロン・ユイ(指揮)、ジャン・ワン(Vc)、中国フィルハーモニック・オーケストラ

入場料: S 6,000円、A 4,500円、B 3,000円

お問合せ: NHK大阪ホールイベントガイド 06-6947-5000

○室内楽の調べ ～堤剛と若い芽たちの共演～

9月29日(日) 14:00開演 千葉県文化会館 大ホール

出演: 堤剛(Vc)、瀬崎明日香(Vn)、相川麻里子(Vn)、松実 健太(Va)、岩崎 直美(Pf)

入場料: 全席自由2,500円(税込)

お問合せ: (財)千葉県文化振興財団 043-222-0077

○ミッシェル・マイスキー チェロリサイタル

10月9日(水) 19:00開演 サントリーホール・大ホール

出演: ミッシェル・マイスキー(Vc)、セルジオ・ダニエル・ティエンポ(Pf)

入場料: S 9,500円、A 8,000円、B 6,500円、C 4,500円、

2002年度会費 振り込みのお願い

会費のお振り込みがまだお済みでない方は、お手続きいただきますようよろしくお願いいたします。

○振り込み先 三井住友銀行 赤坂支店 (普) 7909038

みずほ銀行 神谷町支店 (普) 2712673

〈名義〉日本チェロ協会 (ニホンチェロキョウカイ)

編集後記

この4月より日本チェロ協会の事務局を担当させていただきこととなりました。着任早々のサマーキャンプ、この「会報」と手さぐりで進めるうちに、あっという間の数ヶ月が経ちました。協会は何と云っても会員の皆さまがたのお力で盛り上げていただけてこそ、です。今後とも皆さまの積極的なご参加をお待ちしております。(田中)

日本チェロ協会会報 (JCS NEWS) 第15号

2002年8月31日発行

発行: 日本チェロ協会

東京都港区赤坂1-13-1 サントリーホール内

電話 03-3505-1001 FAX 03-3505-1007

発行人: 堤剛

編集: 日本チェロ協会事務局

編集協力: リュウカンパニー